

監修

新村出
山岸德平

高木市之助
小島吉雄

久松潜一

今昔物語

長野嘗一校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

監修

新村出
山岸德平

高木市之助
小島吉雄

久松潜一

今昔物語

長野嘗一校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「今昔物語」一 長野嘗一校註

昭和二十八年四月十月初版發行

昭和四十一年五月三十日第五版發行

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

北九州市小倉區砂津・名古屋市

中區廣小路）

定價 五二〇圓

長野嘗一（ながのじやういち）

大正四年新潟縣生。昭和十四年東

京大學國文學科卒業。立教大學教

授。主著—今昔物語評論、日本の

コント、現代語譯今昔物語等。

目次

解

説

一、今昔物語の發見……………三

二、名稱と組織……………四

三、短篇小説の寶庫……………一〇

(1) テーマと素材……………一〇

(2) 構成……………二〇

(3) 描寫……………三二

(4) 文章……………三九

四、文學的イイズム……………四四

五、ユーモア……………五四

六、文學的價值……………六三

七、資料的價值……………六五

八、作者と成立年代……………六七

九、宇治大納言源隆國……………七四

(1) 轉換の時代……………七五

(2) 血の流れ……………九六

(3) 宇治の山房……………一〇六

十、參考すべき主要なる研究文獻……………一四一

凡

例

本

文

卷十一 本朝付佛法……………一五三

聖德太子この朝に於いてはじめて佛法を弘
むるものがたり 第一……………一五三

行基菩薩佛法を學びて人を導くものがたり
第二……………一六三

- 役の優婆塞呪を誦持して鬼神をつかふもの
がたり 第三……………二六九
- 道照和尚唐にわたり法相を傳へて還り來る
ものがたり 第四……………二七一
- 道慈唐にわたり三論を傳へて歸り來り神叡
朝にありて試みるものがたり 第五……………二七五
- 玄昉僧正唐にわたり法相を傳ふるものがた
り 第六……………二七七
- 婆羅門僧正行基にあはむがために天竺より
來朝するものがたり 第七……………二八三
- 鑒眞和尚震旦より朝に渡りて戒律を傳ふる
ものがたり 第八……………二八三
- 弘法大師唐にわたり眞言教を傳へて歸り來
るものがたり 第九……………二八四
- 傳教大師唐にわたり天台宗を傳へて歸り來
るものがたり 第十……………二八四
- 慈覺大師唐にわたり顯密の法を傳へて歸り
來るものがたり 第十一……………二八六
- 智證大師唐にわたり顯密の法を傳へて歸り
來るものがたり 第十二……………二九〇
- 聖武天皇はじめて東大寺を造るものがたり
第十三……………二九三
- 淡海公はじめて山階寺を造るものがたり
第十四……………二九〇
- 元明天皇はじめて元興寺を造るものがたり
第十五……………二九二
- 代代の天皇大安寺をとどころに造るも
のがたり 第十六……………二九六
- 天智天皇藥師寺を造るものがたり 第十七
（前文缺）……………三〇三
- 高野姬天皇西大寺を造るものがたり
第十八……………三〇八
- 光明皇后法華寺を建てて尼寺となすもの
がたり 第十九（本文缺）……………三一三
- 聖德太子法隆寺を建つるものがたり 第二
十（本文缺）……………三一六
- 聖德太子天王寺を建つるものがたり 第廿
一……………三一九
- 推古天皇もとの元興寺を造るものがたり
第廿二……………三一九
- 現光寺を建てて靈佛を安置するものがたり
第廿三……………三二〇
- 久米の仙人はじめて久米寺を造るものがた
り 第廿四……………三二七

弘法大師はじめて高野山を建つるものがた

り 第廿五……………三三

傳教大師はじめて比叡山を建つるものがた

り 第廿六……………三八

慈覺大師はじめて楞嚴院を建つるものがた

り 第廿七……………四一

智證大師はじめて門徒を三井寺に立つるも

のがたり 第廿八……………四三

天智天皇志賀寺を建つるものがたり 第廿

九……………四五

天智天皇の御子笠置寺をはじむるものがた

り 第三十……………四九

徳道聖人はじめて長谷寺を建つるものがた

り 第卅一……………五三

卷十二 本朝付佛法……………二六八

越後國の神融聖人雷を縛り塔をたつるもの

がたり 第一……………六六

遠江國の丹生の弟上塔をたつるものがたり

第二……………七一

山階寺に於いて維摩會を行ふものがたり

第三……………七三

田村將軍はじめて清水寺を建つるものがた

り 第卅二……………五五

秦の川勝はじめて廣隆寺を建つるものがた

り 第卅三(本文缺)……………五九

法輪寺を建つるものがたり 第卅

四(本文缺)……………六〇

藤原の伊勢人はじめて鞍馬寺を建つるもの

がたり 第卅五……………六〇

修行僧明練はじめて信貴山を建つるものが

たり 第卅六……………六三

はじめて龍門寺を建つるものがた

り 第卅七(本文缺)……………六五

義淵僧正はじめて龍蓋寺を造るものがたり

第卅八……………六五

大極殿に於いて御齋會を行はるるものがた

り 第四……………七六

藥師寺に於いて最勝會を行ふものがたり

第五……………七七

山階寺に於いて涅槃會を行ふものがたり

第六……………七九

東大寺に於いて華嚴會を行ふものがたり	第七	二八二
藥師寺に於いて萬燈會を行ふものがたり	第八	二八四
比叡山に於いて舍利會を行ふものがたり	第九	二八五
石清水に於いて放生會を行ふものがたり	第十	二八六
修行僧廣達橋の木をもつて佛像を造るものがたり	第十一	二八九
修行僧砂底より佛像を掘り出すものがたり	第十二	二九一
和泉國の盡恵寺の銅像盜人のために壞らるるものがたり	第十三	二九三
紀伊國の人海に漂ひ佛の助けによりて命を存するものがたり	第十四	二九五
貧女佛の助けによりて富貴を得るものがたり	第十五	二九八
獵者佛の助けによりて王の難を免るるものがたり	第十六	三〇一
尼盜まるところの持佛におのづからあひたてまつるものがたり	第十七	三〇三

河内國の八多寺の佛火に焼けざるものがたり	第十八	三〇五
藥師佛身より藥を出して盲女に與ふるものがたり	第十九	三〇六
藥師寺の食堂焼けて金堂を燒かざるものがたり	第二十	三〇八
山階寺焼けて更に建立する間のものがたり	第二十一	三一
法成寺に於いて繪像の大日供養のものがたり	第二十二	三一五
法成寺の藥師堂に於いて例時をはじむる日瑞相を現ずるものがたり	第二十三	三一八
關寺につかふ牛迦葉佛と化するものがたり	第二十四	三一九
伊賀國の人の母牛に生まれて子の家に來るものがたり	第二十五	三二五
法華經を入れたてまつる宮おのづから延ぶるものがたり	第二十六	三二八
魚化して法華經となるものがたり	第二十七	三三〇
肥後國の書生羅刹の難を免るるものがたり	第二十八	三三三
沙彌の持するところの法華經焼けたまはざ		

るものがたり 第廿九	三七
尼願西の持するところの法華經焼けたまは	
ざるものがたり 第三十	三九
僧死にて後舌残り山にありて法華を誦する	
ものがたり 第卅一	四一
横川の源信僧都のものがたり 第卅二	四四
多武峯の増賀聖人のものがたり 第卅三	
三	四八
書寫山の性空聖人のものがたり 第卅四	五五
神明の睿實持經者のものがたり 第卅五	六四
天王寺の別當道命阿闍梨のものがたり 第	
卅六	七〇
信誓阿闍梨經の力によりて父母を活きかへ	
らするものがたり 第卅七	七五
天台の圓久葛木山に於いて仙人の誦經を聞	
くものがたり 第卅八	七八
愛宕護山の好延持經者のものがたり 第卅	
九	八〇
金峯山の薜嶽の良算持經者のものがたり	
第四十	八三

今昔物語一

長野 嘗一

解 說

一 今昔物語の發見

今昔物語は、生誕以來これ九百年、久しく地下の闇にうづもれてゐた。伊勢や源氏とともに、世界的古典としての價值を十二分にもちながら、とかくに菜食好きな日本の文人墨客の机邊を飾りえなかつた。むせかへる人間の體臭と健康な庶民の息吹きとは、はつらつたる動物的蛋白にめぐまれてゐたにもかかはらず、獸肉の食用を拒否しつづけてきた國民性によつて、多年同じく拒否されてきた。

薄茶をたしなみ、散りゆく花にあはれをおぼえ、墨繪の淡彩に雅懷を託する風雅のみちとは、それはあまりに大きな距離がありすぎた。

歌材としての心と詞とを缺くことから、歌人連歌師にうとんぜられ「戀愛」を捨てて「本能」を直視したことが、若き女性を失望させ、僧尼の醜態をあばいたことが、佛徒の離反を買つたのである。たくましい荒削りの魅力はあつても、貴族的な高雅とは縁遠く、これが、多年文學の擔ひ手であつた貴族や中間階級からかへりみられずにうらぶれた根因をなしてゐる。唯一の理解者として囑望せられてしかるべき庶民

大衆は、永く文盲同然に放置せられてきたのであつた。

かんじんの國文學界でも、風俗資料、社會史資料、言語資料として珍重されたことはあつたが、「文學」として高く評價されたとは、いひがたい。たまにこの方面へ眼を向けることはあつても、せいぜい「佛敎文學」「説話文學」といふやうな傍系的地位をあたへるにすぎなかつた。

眞の發見者は意外の方面にあらはれた。――

芥川龍之介、佐藤春夫氏、小島政二郎氏等、文壇の諸氏がそれである。小説が文壇の牛耳をにぎり、自然主義が確立し、やがてその嵐もおさまり、自國の古典に對する回顧が徹底的になされたとき、和漢東西の學殖を兼ねた芥川によつて、先づこの鑛脈が掘りあてられたのであつた。平安朝リアリズムの大作が、現代藝術派の作家によつて發掘された皮肉は、皮肉でも矛盾でもない。

われわれは、今昔物語を、何よりも先づ「文學作品」として考察する上に、一番多くの頁をさかねばならない。何となれば、この面に於ける傑れた特質を今昔物語がもし全然持つてゐなかつたとすれば、それは過去の文學史にプラスする何ものをも持ちえないであらうから。

二 名稱と組織

今昔物語は、正しくは、「今昔物語集」といふらしい。各篇の冒頭いづれも「今は昔」の語にはじまるゆ

ゑである。

「今となつては昔のことであるが」つまり「むかしむかし」の意であらう。これと、末尾の「となむ語り傳へたるとや」の照應によつて、一般に説話文學のジャンルに入れられ、いはゆる今の「お話」と錯覺する向きもあるけれども、内容からみて、今昔物語は、決して單なる「お話」でもなければ、狭い意味の「説話文學」でもない。

もし、この物語が純然たる説話であるならば、單に冒頭末尾に限らず、全文ことごとく話しかける直接の對象を眼の前に置いた書き方をしてゐなければならぬはずだ。ところが、核心の敘述は、純然たる客觀描寫の手法を用ひてゐるではないか。

「むかし男ありけり」「いづれのおほん時にか」——純文學とみなされる伊勢や源氏の冒頭も、これと同巧異曲の文句にはじまることを合はせ考へれば、小説が「物語」として發生した形式の殘映で、たとへば、谷崎潤一郎氏の「盲目物語」や「春琴抄」を説話文學なりと速斷し、まして「お話」だと片づけることが不當であるやうに、今昔物語もまた、「話」の藏とのみ見なすところに、まづ以て重大な見誤りの基があると、考へねばならない。

しかし、また同時に、作家の意圖の上でも形式の上でも、今昔物語が谷崎氏のそれと全く同様であるとも、斷ぜられない。谷崎氏は、初期のエキゾチックな、どぎついばかりの感能を追ふ耽美から、「痴人の

愛」「盲目物語」「蘆刈り」「春琴抄」を経て、最近の「細雪」にいたる變遷のうちに、次第に、やはらか味のある王朝風な古典美を慕ひ、さればこそ、意識して物語體への回歸にいたりついたのであつた。

しかるに、今昔物語では、「説話」としての意識が最初からあつたことだけは、みとめなければならぬ。ことに、メルヘン風の諸篇、説經用の説話とも目すべきものがあまた存することは、かかる意識の存在を否定し得べくもない。が、好篇名篇とも稱すべきは、つとにそれらの幼稚なる原始型をはなれて、あつたべなる短篇小説の實をそなへてゐること、なほ近代作家の手腕にあへて遜色を見ない事實を、しかも何と理解すべきであらうか。今昔物語は、その編成の、一見整然たるに似ず、作家のインテンションに甚だしき「混亂」がある。その混亂は、創作の意圖の上にも思想の上にも、描寫などの手法の上にも、著しいかげを落してゐる。かりに、作者はいはゆる説經的な説話を類聚しようとしたと假定しよう。彼は、しかし、筆を進めてゆくうちに、このやうな説話らしい説話の上には、作家魂がなにも燃え立たない自分を發見して驚いたに違ひない。生々しい現實描寫のリアリズムが、いかに説話様式と背馳するものであるかに思ひいたつて、彼は、矛盾の壁の前にぎょう然と立ちすくんだ。……いづれを採り、いづれを捨てるか、——この二また道に追ひ込まれた彼は、遂にいづれをも捨て得なかつた。中途半端な妥協で彼は兩者を採用した。ここに混亂が生じたのである。

この混亂を「混亂」のまま、すなほにみとめることが、われわれの第一の任務でなければならない。

そして、なにゆゑ、かかる混亂が生じたか、なにゆゑ、作者はかかる混亂を背負ふ運命の人間として形成せられたか、を明らかにすることが、第二の任務としてわれわれに要求せられるであらう。最後に、さうした混亂にもかかはらず、われわれの魂にうつたへ、二十世紀の鑑賞にたへるのは、短篇小説としてのすぐれた文學性にあるのだといふことを、あらためて強く確認しなければならぬのである。

この物語が、「今昔物語」などと、一見いかにも古めかしい名稱を奉られたことは、實際によんでみれば驚くほど新鮮な内容をも、大時代的に蒼然たる古色につつんで、讀者の魅力をひきつける上に、かなり損をしてゐる。それは、源氏物語が、「頼朝、義經の物語」と錯覺されるナンセンスの危険をはらんでゐても、なほかつ優雅なひびきをたたへる典麗な姿に比して、比較にならぬほど大きな損失であらう。あたかも「古事記」の人間的な神々が、生々潑刺たる野人の魅力をふんだんにふりまいてゐるにかかはらず、「ふることふみ」の名稱ゆゑに、一般讀者獲得に貧乏くじを引いてゐるのと同様である。原作者の命名によつたのではないけれども、ジャーナリズムの商業主義ならば、當然、このやうな宣傳下手は避けたであらう。

先行文獻に依據したものはしばらくおき、作者直接の打聞きによる三面記事的な諸篇は、人も事件も眞新しいものが多い。多少むかしにさかのぼるものであつても、作者入神の筆づかひによつて、ちやうど昨日おととひ、隣家隣村で起つた事件の如く、なまなまと寫し出す筆致の迫眞は、「今は昔」などの文句とは、およそ似ても似つかぬ緊迫感をもつてゐる。これを、首尾の説話形式のなかへ入れると、次のやうな

効果を生む。

終末に對して何らの寄與もしない言葉は一語といへどもさしはさむべきではないとする短篇構成の常道よりすれば、冗文たるを免れ得ない。これは明らかに著しい缺點となる。

しかし、多少のみつけものともいふべきは、なまなましい事件をも一應茫漠たる過去の雰圍氣中に包みおき、中間グイと引きしめて、讀む者の全神經を收れんさせ、最後に及んで、「となむ語り傳へたるとや」と、とぼけたやうな突放し方をするによつて、神經の收れんを解放し、邪氣のない朗々たる笑ひのうちに一談語りをへる座談的妙味が、それであらう。

今昔物語は、全三十一卷、うち、卷八、十八、二十一の三卷は、いま散逸して傳はらず、他の諸卷とても、各篇満足にそろはざるもの數卷、完全な原形は知るよしもない。三十一卷といふ端數も不審である。しかし、これだけでも、實に龐大な數量ではないか。卷數に於いてこそ、源氏五十四帖に一籌を輸するけれども、文字の數に於いては、はるかにこれをしのぎ、八犬傳、大菩薩峠、夜明け前などと並んで、非精力的な日本の作家の產量としては、優に一流をゆく壓卷であらう。

うち、卷一から卷五までが天竺（印度）の部、卷六から卷十までが震旦（中國）の部、卷十一以後が本朝（日本）の部と、まづ地域的に三大別し、更に、卷一から卷二十までが大體「佛法の部」、卷二十一以後

が「世俗の部」と色わけされる。その「佛法の部」も、「震旦の部」には、「養孝」「國史」の部などをまじへ、「本朝世俗の部」は、

卷二十一：缺卷 卷二十二：（名稱なし） 卷二十三：附大織冠 卷二十四：附世俗 卷二十五：附世俗 卷二十六：附宿報 卷二十七：附靈鬼 卷二十八：附世俗 卷二十九：附惡行 卷三十：附雜事 卷三十一：附雜事

と、目次にはあるが、卷名が内容と一致しないものもあり、實際には、次のような組織になつてゐる。

卷二十一：（恐らくは皇室の列傳か） 卷二十二：大織冠（藤原氏列傳） 卷二十三：強力譚 卷二十四：諸術藝能譚 卷二十五：武門合戰譚 卷二十六：宿報譚 卷二十七：靈鬼譚 卷二十八：滑稽譚 卷二十九：惡行譚 卷三十：人情譚 卷三十一：雜事譚

くりかへしていふ、このうち最も文藝的な香りの高いのは、卷二十一以後の世俗の部、なかんづく、卷二十三の強力譚、卷二十四諸術譚の一部、卷二十五の武門合戰譚、卷二十六の宿報譚、卷二十七の靈鬼譚、卷二十八の滑稽譚、卷二十九の惡行譚、卷三十の人情譚の一部などで、ほとんど佛教的色彩にいろどられてゐない社會記事であることを銘記すべきである。この物語を、佛教文學の一類としてしか論じない學者評論家などの誤りは、明々白々である。